

ロバート・K・マートン「ハウジングの社会心理学」¹

祐成 保志 訳

はじめに

ハウジング²の社会心理学は、短く不名誉な過去を背負っているが、長期にわたる生産的な未来が開けていると私は信じる。このように未熟な研究領域においては、現在の傾向よりも生じつつある傾向について論じる方がより適切である。なぜなら、ハウジング研究の伝統は社会心理学とほとんど関わりがなかったからである。

その初期の段階では、ハウジングに関する社会調査と心理調査は、社会簿記 (social bookkeeping) に限定されていたと言っても過言ではない。この段階においては、調査は通常、基準以下の住居 (dwellings) の監査からなり、欠陥のある配管、構造、さらには居住者について、微に入り細に入り記述するものとされていた。それは、いわゆる「不良住宅 (bad housing)」——典型的には、高頻度で基準以下の住宅あるいは基準以下の住宅に暮らす世帯集団がみられるスラム地域——と、一連の社会病理——非識字、犯罪、少年非行、高死亡率、貧困、公的救済事例、違法行為、性病——の間の、粗雑でいい加減な相関関係に専念していた。これまで長い間、そして現在もなお数多くの報告が、判で押したように、欠陥住宅がたくさんあるスラム区域が、こうした社会病理によって特徴付けられることを示してきた。しかしながら、基準以下の住宅の、どの側面が、どんな役割を演じているのかを解明した調査はほとんどない。実際、基準以下の住居が担う、他と区別可能な役割を位置づけようと試みた数少ない研究の一つが、次のように指摘している。「不良住宅の物理的側面と、裁判記録によって明らかにされた少年非行の間には、いかなる関係もないということは疑いようがない」(21)〔以下、()内の数字は文献番号〕。

住宅改良に対する社会運動の関心は相当に深い。彼らは、不良住宅の社会的コストを明らかにしていると称する、欠陥の多い保険数理的調査 (actuarial inquiries) を引用することによって、適切な住宅の供給を正当化する「論拠」を打ち立てようとしてきた。しかし、まともな住宅を手にする制度的権利が、公教育の成立とともに教育がそうした権利として定義されたのと同じく意味で、直接的に支持されることはほとんどなかった。適切な住宅の

¹ "The Social Psychology of Housing" by Robert K. Merton from *Current Trends in Social Psychology*, edited by Wayne Dennis, © 1948. Translated and published by permission of the University of Pittsburgh Press.

² 'housing' には、単に居住用建造物のみを示す「住宅」よりも幅広い意味が含まれている。とくに重要なのは、住宅の供給を通じて人々を空間内に配置する制度や機構の側面である。本訳稿では、こうした 'housing' の多義性を強調する場合には「ハウジング」の語を用いた。この他、訳者による補足は文中の〔 〕内に記した。

制度的な保障を要求する主張は、不良住宅の逆機能的効果を示していると称する研究が、この領域における、より前途有望な研究動向の兆候であるという主張に同意することなしには、支持されないように思われる。

社会簿記が何の役にも立たないというわけではない(1, 40)。それが、社会心理学という科学や、この科学の実務的な住宅問題への応用と、ほとんど何の関わりも持たないと言っているわけでもない。

ハウジングに関する、新たな、実行可能な種類の社会心理学研究に着手するためにまず必要な知的努力は、根強く固定された「ハウジング」と「スラム住居」の関連付けを回避し、この領域の社会心理学がもっぱら劣悪な配管や社会的逸脱を取り扱うものであるという暗黙の仮定を捨て去ることである。

1 ハウジングにおける研究の危険

ハウジングという領域で研究に着手し、求められている研究の全体に向けて歩みを進める社会心理学者は、誤った社会簿記の袋小路をやり過ごしたとしても、一連の厄介な危険(hazards)に直面する。これらの危険は、ハウジングの社会心理学において生じつつある傾向の方向性や内容にさまざまな影響を与えている。第一に、ハウジングに関わる社会制度は重要な転換期を迎えている。第二に、ハウジングは、アメリカ社会の主要な職能集団と権力集団がもつ経済的関心と社会的感情を含んでいる。ハウジングの社会心理学における現在および将来の傾向を評価するためには、ハウジングという実質的(substantive)な領域に研究上の関心を向ける社会心理学者が直面するこれらの危険のうち、顕著なものについて検討する必要がある。

1-1 制度をめぐる十字砲火の危険

ハウジングは相対的に急激に変化しつつある社会制度である。そして、著しい変化を被っているあらゆる制度的領域がそうであるように、ハウジングという領域は、対立と論争に事欠かない。建設すべき住宅の形式、建設すべき量、どのように建設するか、誰のために、誰が建設するか——これらすべては、経済、社会そして文化に根ざした、利害と感情に関わる激しい対立を含んでいる。中心的な問題のいくつかは結びつけられてきた。すなわち、全部または一部を公的住宅とするか、私的な財源による住宅とするか、所有にするか賃貸とするか、独立住宅とするか集合住宅とするか、人種隔離(racial segregation)とするか混住近隣地区(nondiscriminatory neighborhoods)とするか——これらの選択肢のペアのそれぞれをめぐって、自らの利益を満足させることに関心をもつ、さまざまな巨大で有力な集団がひしめいている。彼らは、それぞれの選択肢がもたらす社会学的・経済的・心理学的帰結を調査によって明らかにすることには、それほど関心をもたない。

それゆえ、ハウジング研究に力を注ぐ社会心理学者は、制度をめぐる戦場の衝突と混乱に巻き込まれ、それなりに平穏と静寂が保たれている学術研究室の環境を手放そうとしていることを自覚せねばならない。その上、どちらかの陣営に属していないとしても、社会心理学者は激しい十字砲火を浴びることを覚悟せねばならない。彼の研究成果——それぞれの住宅

政策の選択がもたらす社会心理学的帰結についての科学的分析——は、たとえあったとしても、ほとんど彼の意図したようには受け取られないだろう。その代わり、各々の研究成果は、どちらか一方の陣営から、不変の忠誠もしくは逃亡の証として受け取られる。

例えば彼は、持ち家 (homeownership) の偉大なる価値についての、文化に深く根ざした感情が、不動産業者、ローン業者、建設業者、住宅設備会社、大学の学長、知事、市長、そしてただ一人生き残っている元合衆国大統領といった人々による果てしないご託宣によって、細部に至るまで強化されていることを明らかにするだろう ("house" ではなく "home" の所有という語句自体が、おそらくこの特定の所有形態から生じる感情がもつ独特の雰囲気を示している)。社会心理学者は、さらに、住宅所有と結びつけられた感情が、多くの中・低所得者の注意を、現在の制度的配置の下で持ち家が彼らに対してもたらす大きな経済的リスクからそらすように働いていることを見出すだろう (13)。このような、合理的意思決定における感情の役割についての冷静な分析を行う社会心理学者は、必ずや、ある社会階層のために、所有ではなく危険で異端的な賃貸を提唱しており、さらには、抵当権保有者だけでなく個人の持ち家所有者のリスク要素も同様に軽減する制度上の再配置を支持していると思えるだろう。大きな決定の舞台では、いくつかの社会心理学的研究成果は、研究の客観性とは関わりなく、「危険思想」のレッテルを貼られる。

また、社会心理学者は、自治体が、都市再開発法の下での土地収用権の行使や免税補助金の給付によって民間住宅投資家を支援するだろうと述べ、場合によっては、こうした支援が、先行する人種・民族差別の慣行を差し控えることを条件としていると指摘する。そして彼は、自らの研究を、ハウジングにおける現在そして未来の発展に関与させることを目指すなかで、人種混住の近隣地区における黒人と白人の間の友好的な社会関係を促進したり阻害したりする条件についての研究に乗り出すだろう。

社会心理学者は、自らの研究上の決定の重要性について十分に意識的でなければならない。彼は、社会的に意味のある研究に従事しているだけであり、現在、住宅に関わる制度的構造において生じている変化に対応し、科学的調査を科学的かつ実務的な適切性をめぐる問題に適用していると信じているだろう。しかし実際には、彼はそれ以上のことをしている。彼は、社会学における無人地帯での危険な偵察任務に志願しているのだ。そこで彼は、あらゆる陣営からの十字砲火に身をさらすことになる。

彼が、相互の和解が成立していない人種混住の住宅地での摩擦や対立に気づいたとしよう。すると、公的機会への平等なアクセスというアメリカ的信条の支持者の隊列からの脱走者と見なされ、すぐさま多くの人々から糾弾されるだろう。あるいは、混住コミュニティにおいて、適切な管理上の決定によって友好的な人種関係が生まれつつあることを見出したとしよう。すると彼は、人種間の完全隔離を主張する、他の経済的・感情的利害の当事者たちにとって格好の標的になるだろう。社会心理学者が、図らずも人種混住の公共住宅コミュニティを研究することになったとすれば、彼は、連邦住宅局の政策立案者が、人種混住コミュニティがまぎれもなく存在するという事実が世間の注目が集まること、そして、自発的な人種混住を義務的な混住に向けたキャンペーンと同一視する下院議員たちによって公共住宅へのさらなる攻撃の根拠にされるのを恐れていることに気づくだろう。あるいは、極端なことを言えば、それぞれの利害陣営の代弁者たちは社会心理学者に向かって、争うように自説を

展開する。すなわち一方の陣営は、「誰でも知っているように」、隔離されていないコミュニティでこそ人種間の友好的な付き合いが可能になるのだから研究など必要ないと断言し、もう一方の陣営は、「誰でも知っているように」、均等な住宅からなる混住コミュニティでは人種の平和で調和的な生活は成り立たないのだから研究など必要ないと断言する。

（これは単なる憶測ではない。過去6ヶ月以内に、ある黒人全国組織の研究責任者は私に、「居住コミュニティにおける黒人と白人の間の友好的関係にプラスあるいはマイナスに働く要因についての研究など必要ない。なぜなら、必要となる事実はすべて手に入っているからだ。必要なのは、均等な混住コミュニティの実現のために行動し、圧力をかけることだけだ。」と断言した。そして、住宅地開発に莫大な資金を投資しているある民間大企業の広報担当者は次のように言い切った。「中流の近隣地区での黒人白人関係など、研究しても仕方がない。黒人と白人に、『関わり合いをもつ』用意などありはしない。それだけのことだ。同じ労力をかけるなら、我々が答えを知らない問題についての研究に使ってほしい。」）

このような十字砲火を浴びて虫の肉（worms' meat）になる前に、社会心理学者は、「公共機関も民間企業も、どちらの住宅供給者もいい加減にしろ。」（"A plague o' both you housers, public and private."）と叫ぶ強さを奮い起こすだろう。

しかし、社会心理学者はもっと冷静でなければならない。研究が重要な決定を左右するとき、研究は中立性の特権をもたない。社会的に意味のある研究をしているとき、彼の調査結果は、いずれか一方の利益集団を支持するかのように見える。このため、社会心理学者は賞賛と批難を交互に受けることを予期しなければならない。彼は、問題をあらゆる角度から検討するという職業規範に背き、どちらか一方の陣営の立場に固執する場合にのみ、ある時点に限ってではあるが、戦場で中立を目指す危険にさらされずにすむだろう。

1-2 研究上の要請が競合する危険

社会心理学者が、ハウジングをめぐる正反対の利害を主張する者たちの間で展開される戦闘をかいぐって生き残るという奇跡を起こす、と仮定してみたい。そのとき彼は、依然として、ハウジングに関わるさまざまな（必ずしも対立しているとは限らない）専門的実践家たち——体系的な調査を必要とする独特の問題にそれぞれ関心をもっている——からの攻撃の矢面に立たなければならない。建築家に関わる一連の研究課題に関心を限定する社会心理学者は、住宅行政官が彼の研究を仕事の役に立たないと見なしていることに気づく。そして、もし彼が行政官の必要に対応するように研究方針を転換すると、建築家から、的はずれな研究であるとして批難される。なぜなら、この広大で不定形なハウジングという領域においては、関与するディシプリンと専門化された研究課題はあまりにも多い。そのため、一人の実践家にとって妥当な研究が、他の実践家にとっては見当違いであるということが頻繁に起こる(14)。あまりにも多くの研究が必要とされており(23)、しかも現在までになされた研究があまりに少ないので、研究をこの領域の実際的な必要に適用しようとする社会心理学者は、自分の研究をすべての住宅関係者にとって意味あるものにするなどという、実現の見込みがない目標を掲げながら、自分が一つの問題から別の問題へと次々に引っぱり回されているように感じる。社会学者および社会心理学者による、訓練された研究を待っている多様な問題のうち、一部だけを挙げてみよう。

- ・建築家は、さまざまな社会階層の間で、「プライバシー」の概念がどんな幅をもっているかを知りたいと思っている。そして、家族の規模や構成の変化にともなうプライバシーに対する必要の変化に対応するように、住宅の内部空間を改造するだろう。
- ・大規模賃貸住宅団地の管理人は、居住者による適切なメンテナンスを動機づけるにはどうすればよいか、あるいは、居住者を厳しい管理に従わせているという批難にうっかりと根拠を与えないためにはどうすればよいかを知りたい。
- ・大規模住宅地に巨額の投資を行っている民間企業は、居住者を選抜する際の人種制限が撤廃されると何が起こるか、コミュニティ内で人種間に生じうる緊張を最小化するにはどうすればいいのかを知りたい。
- ・住宅行政官は、住民協議会や、居住者のモラルを維持したり減退したりする他の組織集団の役割、そして、コミュニティ・センターがコミュニティの社会的資源として活用されたり、冠婚葬祭の時にしか使われない無用の長物になったりする社会的過程を知りたい。
- ・不動産業者は、賃貸住宅で利益を上げ、独立個人住宅の購入市場を支配する手順を知りたい。
- ・都市計画家は、さまざまな社会経済階層を包含するようにデザインされたコミュニティと比べて、単一階級コミュニティが及ぼす社会的・心理学的結果を知りたい。

そして、このリストはどこまでも延びてゆくだろう。複合的な社会制度としてのハウジングとさまざまな仕方で関与している多数の専門家集団は、それぞれに異なった社会的・心理学的側面がある、それぞれの問題をもっている。

もちろん、調査を必要としている問題の広さと多様性は、社会心理学者を新しく未開拓の領域に取り組む気にさせる、確実な資産ととらえることもできる。他の問題ではなくある問題に取り組むために、彼の専門的優位性を行使するかどうかは、彼のみに委ねられている。この決定は、研究課題の科学的性質だけでなく、この研究が社会的にどのように利用されるかにもとづいている。ハウジングという領域で仕事をする大胆な社会心理学者を待ち受ける、他の関連する危険がなければ、そういうこともありうるだろう。他の危険とは、緊急性の危険のことである。

1-3 緊急性の危険

ハウジングの社会心理学に関する研究は始まったばかりである。したがって、あらゆる種類のハウジング実践家によって今なされねばならない数えきれないほどの決定に影響を与える、蓄積された知識はほとんどない。ハウジングに関する管理上・立法上の決定あるいは経済的・建築的決定のテンポが、社会心理学における応用研究のテンポよりも速いからだけではない(4f)。むしろ、最近になって遅ればせながらこの領域に照準を合わせた社会心理学は、まだ、政策立案者によって検討されうる適切な研究成果の在庫を十分には蓄えていないからでもある。その結果、実用的研究へと招集されるとき、社会心理学者はその日暮らしの生活を送らなければならない。彼はデータを処理するやいなや、暫定的な結果を発表することを

期待されている。

結果をひねり出すことへのプレッシャーは強烈で、継続的で、まったく無理からぬものである。公共住宅についての法制定が差し迫っている。民間住宅地はまさに造成中である。都市再開発が進行中である。これらすべては大規模で長期間にわたる深い関与である。もし、社会心理学者が社会における地位にふさわしい人物であろうとすれば、彼らが必要とするとき、すぐさま成果を上げなければならない。いつになるか分からない将来に、試行錯誤を通じて知ることができることなど意味がない。社会心理学者は、十分な根拠がある正当な結果を手にするはるか前から結果を出すことを求める、あらゆる方面からの強力なプレッシャーを覚悟しなければならない。さもなければ、彼は、結果を切望する住宅計画者に背を向けて、統計表や実験計画をいじくり回しているだけであるとの非難を受けるだろう。社会心理学者の関心は暫定的な仮説を適切なやり方で検証することに向けられるが、それは、ハウジングに関わるいまここでの決定を求める差し迫ったプレッシャーとは、当面の間すれ違うことになる。あたかもハウジングについて研究する社会心理学者の苦悩を念頭に置いているのかのごとく、ロバート・ルイス・スティーヴンソンは述べている。

「これは、物事がほとんど検証されない、書齋の中の科学などではない。我々は銃口を頭に向けて理論を作っている。我々は、時間が尽きる前に、判定を下すだけでなく行動を起こさなければならないという新たな状況に直面している。」

1-4 経験主義の危険

いまここで適用できる研究成果への緊急の要望は、ハウジングという領域に挑む社会心理学者にとっての、もう一つのリスクとむすびついている。それは、経験主義の危険である。

社会心理学者は、ハウジングに関わる実践家が、概して、立証された経験的結果——彼らが体系的科学の観点からすればいかに取るに足りず、要領を得ないものであっても——に満足していることを知るだろう。実践家の態度はマラリアに苦しむ患者のそれと似ていなくもない。患者はキニーネがこの病気の特効薬であることを知ったときには、それ以上のことは問わない。「効く」ならばそれで十分なのである。基礎研究によってさらに効果的な治療法が達成されるということは、彼にとって全くどうでもいいことである。

患者は、医学研究者から、キニーネに含まれる何らかの未知の物質が、何らかの未知のプロセスを経て、マラリアと呼ばれるよく分からない病気に作用するということが知られておらず、理論的には、あるいは理論的に洗練された治療としては、ほとんど何も分かっていないと聞かされても、容易には信じないだろう。しかしながら、ラヴランがマラリア患者の血液中に寄生虫を発見し、寄生虫の生活史がこの病気のままさまざまな段階と関連していることを明らかにし、ロスが寄生虫の運搬者が羽斑蚊であることを突き止め、羽斑蚊に刺されてから一定期間後にマラリアに罹ること、そしてキニーネの特定の科学的特性が寄生虫の持続的生存のための必要条件に作用することが明らかにされてはじめて、そして、これらの細部にわたる構成要素と過程が特定されてはじめて、キニーネの粗野で経験主義的な適用は、医学的知識の巧みな適用へと変換されるのである(16)。

ところが、ハウジングという領域においては、純然たる経験主義と科学研究の違いが、あまり広く理解されていない（他の多くの社会的実践の領域より以上に）。ここでは、経験

主義はいまだに強い力をもっている。この領域に参入するとき、社会心理学者は、特定された心理学的・社会学的変数の間の関連についての、計量分析の誤用や素朴な経験主義にもとづく研究成果に対して免疫をつけておかねばならない(4b)。ハウジングの実践家がこれらの理論的探索に関心をもつことは、——マラリアの犠牲者がキニーネの経験主義的な利用を越えた進歩を熱望すること以上に——期待できない。

例えば、我々が現在進めているコロンビア-ラヴァンバーグ研究(4c)では、計画的住宅地(planned housing)の居住者で、地域のボランティア団体および組織に属する人々は、より深くコミュニティに根ざしていることが分かった。彼らは、期限を設けずに住み続けるつもりであることが多い。住民の転居率を下げる方法や手段に関心をもつ住宅管理人は、住民間の組織形成を促進することで、この経験的知見を「応用」することを望むだろう。管理人には、さらに研究を続ける理由がない。しかし、この研究成果の理論的変数がいまだ特定されていないという事実には変わらない。どんな種類の組織でも定着につながるのか？あるいは、住民の集合的な必要に関する実感に対応して出現した組織だけが、社会的な根付きを生み出すのか？もし後者だとすると、管理スタッフによる組織の導入は必ずしもこうした結果をもたらさないだろう。これらすべては、管理人にとってはほとんど空騒ぎに見えるかもしれない。そしておそらく、こうした態度は、実践家が度重なる経験によって、きわめて実践的な観点からみてさえも経験主義が割に合わない、ということを受容するまで続くだろう。あえて推測すれば、現実的な実践家は、相当な理論的知識の蓄積が応用のために利用できるという条件の下でのみ、純然たる経験主義は目前の限定された問題に対してさえ信頼できる解答をもたらさないと考えるようになるのだろう。

ハウジング研究におけるこのような経験主義的傾向は、単に、すぐに応用できる研究成果に対する実践家の関心に根ざしているだけではない。それは、社会学者が細部まで行き届いた方法論的デザインに全面的な関心をもつことの結果でもある。そうした研究は、しばしば巧みに統制された実験から構成されているが、研究の中で扱われている変数を理論的に説明することには失敗している。ハウジングの社会心理学において、いくつかの方法論的には鋭く的確な研究が、明らかに、理論的で実質的な内容に関する難題を抱えている。この点で、チャーピンによる、「スラム・クリアランス」「リハウジング」「良質な住宅」の「効果」についての見事にデザインされた一連の実験は(6)、方法論的洗練と完全な実質的経験主義の組み合わせを体現している。一つの例が一般的な論点を明らかにするだろう。

ある研究(5)においてチャーピンは、「公共住宅団地におけるスラム家族のリハウジングが、これらの家族の生活状態と社会生活の改善をもたらす」という仮説の検証を目指している。彼は、実験的手法とコントロール・グループを含む、非の打ち所のない困難な研究を通じて、住宅団地の家族において、「社会参加」の顕著な増加、改善された「リビングルームの装飾状態」、そして空間の「過密利用」の減少を見出す。それはまさしく、キニーネがマラリアに効くことを経験的に発見するのと同じレベルの発見である。では、社会参加を増大させる効果が観察されたとして、それを導く「公共住宅団地」の構成要素、構造、そして過程とは何か？それらは地域管理方針のなかの特定可能な要素なのか？集合的にのみ達成されうる共通目的が出現したのか？地域集団組織者が行使する圧力のもとでの名目的な参加にすぎないのか？

「公共住宅団地」が社会参加を促進するかしないか、という日常的な言い回しは、社会心理学あるいは社会学という科学における命題とは異なる。この知見は、「公共住宅団地」という包括的な用語に隠された、社会参加に関わる諸変数の独特な複合体〔を解明するため〕の手がかりを提供するわけではない。どれだけ大雑把な見積りであっても、研究が非分析的な用語（「住宅団地」のような）ではなく決定変数の研究に向けて組織されているときにのみ、ハウジングの社会科学研究は、素朴な経験主義のレベルから累積的な知識へと変化するだろう。そして、方法論的に綿密であるよりも、理論的に意味のある研究が設定されるときにのみ、実践家はこれらの知見を最大限に活用できるだろう。経験主義的な知見よりも理論に敏感な研究こそが、住宅政策への社会科学の信頼性のある応用の前提となるというのは、矛盾でも何でもない。

思うに、こうした考察はハウジング実践家から抵抗を受けるだろう。だからこそ、この領域で活動する社会心理学者が、せっかちな経験主義的な知見という安易で空虚な路線ではなく、基礎理論志向の経験的研究という、より困難であるが最終的にはより生産的な路線を選択することが、なお一層必要となるのである。

2 ハウジング研究に関する現時点の展望

このように数多くの危険についての不愉快な見通しを考慮すれば、そもそもなぜ社会心理学者がハウジングという領域に足を踏み入れなければならないのか、という問いが發せられるだろう。一世代または二世代にわたって社会心理学者によって耕され、開拓された領域で課題が山積しているときに、なぜ厄介な課題を探索するのか。何しろ、この会議のプログラムを見れば明かなように、マス・コミュニケーション、人種関係、文化間接触、あるいは社会的知覚、態度測定、そして感情形成に関する理論的領域といった実際的な分野が研究できるのである。

確かにその通りであるが、反論できないわけではない。ハウジングという領域への進出は、少なくとも一人の研究者に、リスクに相当する科学的収穫があると納得させた。「ハウジング」という語に包含される人間行動の数多くの様々な事項は、社会心理学者にとって著しく生産的な研究領域を提示している。その理由は、確かに注目に値する。

2-1 基礎的および応用的社会心理学の相互関係

「ハウジングの社会心理学」は、科学的ディシプリンと実践的応用の間の相互関係を伴う。科学としての社会心理学が、ハウジングにおいて直面している実質的な問題の研究から得るものは大きい。逆に、社会的な活動および社会の生産物としてのハウジングという領域にとっても、社会心理学における基礎研究の応用から得るものは大きい。

ハウジングは、多くの社会心理学の知見についてさらなる経験的検証を行うための戦略的分野を与える。例えば、人口が黒人と白人にちょうど二分されている人種混住の住宅地で、黒人に敵意をもっている白人居住者の間では、そのコミュニティでの将来の人種比率について著しい不安が生じていることが分かった。これらの不安は、黒人の比率が上昇し、現在の社会的均衡が乱されるという確信につながっている。そして、彼ら自身の気がかりな予想へ

の反応として、条件が整いしだい転居しようと計画している。それゆえ、「人種的不寛容層」の間にみられる、こうした相互に関連しあう態度、不安、行動の複合体は、社会生態学者が人種の侵入および撤退と呼んだ事態の発端となる。

このような侵入と撤退の過程の心理学的次元を位置づけることによって、社会心理学者は、科学に貢献するだけでなく、この過程を制御するための実現可能な基礎を提供する。住宅行政官は、コミュニティが単一人種で構成された人種隔離区域になってしまうことを認めないような、居住者の人種比率についての行政的安定化〔を行う〕という立場を鮮明にすることができる。現在の均衡の維持を計画的に保証することは、将来の「異」人種の侵入に関する不安を抑制し、現在形成途上にある人種間の相互和解の継続のための土台を整えることに役立つだろう。計画的コミュニティ（planned community）は、そうした重要決定を行う中央管理を欠いた漸次的コミュニティ（crescive community）とは対照的に、非計画的コミュニティの特別な状況の下では「正常」とされてきた侵入と撤退の過程を制御しうる。

きわめて手短かに言えば、このことは、ハウジングという領域において、社会心理学の基礎と応用の間の相互関係が生じる潜在的可能性を示しているだろう。

2-2 社会科学におけるディシプリン間の協力の焦点

もちろん、ハウジング実践家——建築家、建設業者、地域プランナー、行政官、団地管理者——が直面する実践的問題は、どれか一つのディシプリンによって解決することはできない（あたかもそれらが純粋に経済的または建築的または社会学的な問題であるかのように、決定がなされることがあるけれども）。この領域における、各々の実践的問題は多面的であり、多様なディシプリンの視点から研究する余地がある。

例えば、「プライバシー」という問題は、壁の防音、住宅に隣接するフェンスで囲われた屋外空間、途中の部屋を横切らない住宅内通行のための条件を整備する〔のが仕事の〕建築家によって解決される問題ではない。異なった社会集団の間でプライバシーに対する理解がどう違うのか、プライバシーにはどのような類型があるのか、そしてさまざまな社会階層において、それらにどの程度の重要性が割り当てられているか——これらは、社会学者や心理学者による研究を必要とする問いである。そして、コミュニティ・センターを建設するかもしれないかという決定もまた、住宅経済学者だけが——彼が、居住者の満足度、ひいては転居率におけるコミュニティ・センターの潜在的役割に関する事実を意のままに使えない限りは——決定する事柄ではない（一度、極端な売り手市場の状況が生じると、過去の売り手市場が忘れ去られる）。あるいは、人種、宗教、社会的地位にもとづく居住制限の撤廃を実行するという法制度上の決定を、単なる法的問題と見なすことはできない。それは、人種構成におけるこうした変化が実現されるための最適条件についての問いを引き起こす——そうした条件については、社会学者や社会心理学者による調査の余地がある。

この領域における実践的問題が占めるウェイトは相当に大きく、いくつかの社会科学およびその他のディシプリンによる共同研究を必要としている。ハウジングにおける研究の主要な機能の一つは、さもなくば生まれなかったような種類の学際的研究に、当分の間、根拠とプレッシャーを与えることである（4f）。そうした共同は、経験的調査に根ざした、理論的に有望な基礎的社会科学の登場を心待ちにする人々によって、熱望されている。そこでは、

いくつかの科学によって分析的に解体された具体的な全体像が、再び組み立てられる。

2-3 基礎的社会単位の場合

社会心理学的調査の焦点として、ハウジングは、社会学者が「第一次集団」と呼ぶもの、すなわち、対面的な接触とメンバー間の感情の融合を含む集団の、テリトリー的基盤(territorial base)へと注意を向けるという、さらなる利点を有する。

住戸(dwelling unit)は、子どもが最初に社会化される場所である。そこでは、子どもの性格構造の大部分が形づくられる。社会化のパターンが主に住まいの内部で成立するだけでなく、ある面において、それらは住宅とその内部を指向しているように見える。「過密」の効果についての適切な観察がありながら、過密がもたらす社会心理学的結果についての体系的な研究には、重要な論点が残されている(35)。同様に、自由行動あるいは抑制および制御の提供において、独立住宅と比べて集合住宅が効果をもつのかという点についても(38)、さらなる研究の余地がある。

住宅当局が財政的理由により、住宅団地を低層の独立住居ではなく、高層形式で建設すると決定するとき、そこで成長する多くの子ども的人格形成に著しい影響を与えるというようなことが、どの程度あてはまるのだろうか？小さなアパートでの空間をめぐる衝突は、どのように、親子間の不和につながるのか？(39)この種の、住戸内部の生態学と人格の社会化を関連づけることを目指す問いについては、多くの人々が強い意見をもっているが、必要な事実はほとんど手にしていない。

しかし、一戸建てであろうが、集合住宅構造の中に収容されていようが、住戸が、心理学的な意味でも、社会学的な意味でも単独で存在しているわけではないということは、よく認識されている。住宅とそこに暮らす家族は、不可避免的に、彼らがいる近隣地区とコミュニティに緊密に結びつけられている。個人が地域コミュニティに根を下ろす条件は何か？そして、流動性の高さがもたらす心理学的帰結とは何か？

いわゆる生態学的な競争と分配の社会的過程は、ほぼ単一の経済階層——そして多くの場合、単一の民族あるいは人種の集団——からなるローカルな都市近隣地区(local urban neighborhoods)が形成されるという結果を招くことを考慮しなければならない。人生の早い時期を、こうした「社会的に均質な」(あるいは「社会的に偏狭な」)区域——他の集団のメンバーとの接触が、頻繁で心が通った、個人的なものではなく、希薄で偶発的で型にはまったものでしかない——で過ごすことによる、持続的な心理学的効果とは何か？集団間の差異に関する、こうした特別な表現は、成長した後も埋めることが困難な、集団間の亀裂と心理学的距離——自分たち以外の集団(out-groups)は「本当のアメリカ人ではない」という頑迷な信念を楯に民主主義的信条に刃向かうような——に、強固な心理学的基盤を与えるのか？自分「自身」と同じ経済的、社会的、民族的性質からなる遊び集団にいる子どもは、将来、「よそ者」を彼の組織、近隣地区、大学から締め出すような大人になるのか？

要するに、まさに、ハウジングとそれに付随するすべてが、最近になってようやく社会心理学者による研究の焦点となったという事実が、そうした研究の多くに日和見主義の傾向があることを示唆している。社会心理学者は、性格構造の基本が、おおむね世帯、遊び集団、近隣地区といった小規模な第一次集団で過ごされる人生最初の数年間において形成される、

という一般的仮説に固執するだろう。けれども、これら小集団についての、それぞれの物理的環境の下での研究(36)が、彼らの科学的課題の本質的な部分であるという含意には背を向けるだろう。たとえ第一次集団が、主要な社会経済傾向への受動的反応でしかないと仮定されるとしても——これは粗大で論争の余地のある仮定であるが——、これらの傾向が、いかにして、社会化の媒体を通じて性格構造へと鍛造されるかという点については、依然として精査する必要がある。これ以外のことをするのは、認められていない無知と大差ないような知識の表明と同じことのように見える。

地域コミュニティに関していうと、これは、しばらくの間、社会学者と社会心理学者が異なった社会組織のパターンがもたらす社会的帰結を調査してきた領域である。しかしここにおいても、多くの事柄についてさらなる調査が必要である。コミュニティ構造の主要な新しいパターンは、まずヨーロッパ諸国において、続いてわが国で発達した(17,45)。それは「計画的コミュニティ」である。そこでは、居住コミュニティを構成する住戸の数、規模、分配、組織が、野放しの増大がもたらす偶然の副産物というよりも、多かれ少なかれ計画の対象となる。計画的コミュニティは、まだ新しく、そのため、継続的な改良を受け入れる状態にあり、相応の地域施設——市場、職場、娯楽施設、社会的接触と計画された組織活動——をもたない単なる居住区域という最も限られた形態であったとしても、計画的コミュニティは、社会科学における研究にとって、並外れた実験室を提供する。

(この論文を通じて、我々は、「計画的コミュニティ planned community」「住宅団地 housing project」「住宅地 housing development」「団地 housing estate」という語をほぼ同義の用語として扱う国家資源委員会の用法に従っている。それがもし当面の目的に適していれば、各用語は他と区別されるだろう。総合的な計画に従って構築されたコミュニティは、もちろん居住区域だけでなく、日常生活で標準的に必要とされる各種の生産および消費施設を備えている。しかし、これらすべては、いま論点となっているものとは別の問題を提起する。この用法はまた、「住宅団地」という語に関するタブーを破る。このタブーは住宅当局者や居住者にとっては珍しくないものである。彼らが伝えるところによれば、この語は「低所得」「施し」「慈善」を暗示する。ヴェブレンは「高所得」と「個人的能力」の方程式の起源を巧みに分析したが、我々は「低所得」と「個人的能力不足」の暗黙の方程式に同意しないので、言葉のタブーを破る小さなリスクに踏み込み、使い勝手がいいときにはいつでも「住宅団地」の語を採用する。)

計画的コミュニティは、多かれ少なかれ、——さまざまな方向に漸次的に成長する非計画的コミュニティに比べればはるかに——程よく自己完結した領域的単位となっている。このため、社会的相互作用のパターンを、より容易に追跡、分析することができる。予備的研究が明らかにしたように(28)、多くの個人的関係は、相対的に限定された区域の内側にある。

個人間の影響力の流れ(4a, 4h)は、社会心理学者が無視してきた主題である。通常、社会生活の文脈において研究することが難しいのが、理由の一つである。これは、こうした計画的コミュニティの管理を担う人々と、人格の相互作用に関心をもつ社会心理学者の双方にとって、重要な論点である。

大規模で非人格的なコミュニティ構造における、小規模な、凝集力の強い集団の出現や、これらと、思い入れのある集団への個人の係留(anchoring)の関係も、研究の余地がある。

そして、すでに示唆したように、これらのコミュニティが制御されているからこそ、これまでほとんどの場合、漸次的に形成された、計画されていないエリアにもとづいて生み出されてきた、社会学者による数多くの生態学的知見を、実験的に検証することが可能になる。漸次的コミュニティにおける無数の私的で互いに関連のない決定の社会的な最終生産物と、計画的コミュニティにおける公共的で統合された決定の社会的な最終生産物は、どのように比較されるだろうか？社会生態学は、非計画的コミュニティでの非人格的過程とされるものを扱い、その研究を不可避免的に幅の狭い観察に限定してきた(34)。計画的コミュニティでも、同様の生態学的パターンが出現するのだろうか？例えば、我々はやはり、計画的コミュニティにおいても、漸次的コミュニティでよくみられる(43)民族的・宗教的「島」を発見するのだろうか？もし、こうした小規模の同質的集団の生態学的編成が発展しないとすれば、そもそも、中央からの行政指導の下では、そうした意図的もしくは不慮の人種隔離のパターンが生じないとすれば、それは、多様な民族的、宗教的、人種の集団の間での互酬的な態度や関係の発展と、何の関わりがあるのだろうか？これから見るように、計画的コミュニティは、この種の問いに答える上で、立派に役立つ素材を提供する。

いずれにしても、既存の近隣地区の内部および周辺での個別住戸の増大とは異なった性質をもつ、計画的コミュニティと大規模住宅地の数は増え続けており、現代のハウジングは、地域コミュニティにおける人間関係において、「何が起きているか」あるいは「何が起きたか」についての継続的観察というよりも、「これから何が起きるか」についての研究にとって、前代未聞の実験室的環境を提供している。

ここまでの議論について、まさか、「計画的コミュニティ」または「大規模住宅地」が人間同士の対立や社会的な不公正を解決したと述べていると解釈する読者はいないだろう。この文章は、現時点でそれが示しているところを述べているだけである。達成可能なことからどれだけ遠く離れていても、中央管理にともなうこうした発展は、コミュニティの生態学的過程につきものとされている隔離、流動性、対立の社会的過程を、部分的に修正・抑制できる立場にある。ともかく、計画的コミュニティは、コミュニティ構造の修正についての限られたテストケースを提供する非計画的あるいは漸次的コミュニティのありふれたパターンからは、十分に離れている。その限りで、計画的コミュニティは、他の条件下ではコミュニティ構造におけるこれらの変数のいかなる類似物もほとんど再現できない社会心理学者の研究ニーズに、よく合致している。

3 ハウジングの社会心理学における新傾向

このように、ハウジングという領域に足を踏み入れる社会心理学者が、制度をめぐる十字砲火、多方面からの専門的要望、緊急性、経験主義という危険に遭遇することを予期するとすれば、彼はまた、実質的な領域——基礎的および応用的な社会科学の迅速な互酬を可能にし、学際的な共同研究の焦点をもたらし、社会の第一次集団における社会的および心理学的過程の研究のための実験室を与える——において研究することによる見返りもまた期待できるだろう。

同様に、社会心理学者が差し出す援助を一時的に受け取るハウジング実践家が、彼らに

とって危険思想とみえる考えや、たまに見当外れで、いらいらするほど進展が遅く、抽象的なことも多い研究に耐えなければならないとしても、彼らは、他の領域においてそうであるように、この「ハウジングという」人間活動の領域において下されねばならない重要な決定に影響を与える確かな根拠をもつ研究という収穫を手にすることへの、さらなる確信を得るだろう。

現在でもさかんな、不良住宅と関連するとされる社会病理の焦点化はさておき、多岐にわたる他の研究上の注目の焦点が最近になって浮上してきた。これらは数が多いだけでなく多様性に富んでいるので、すべてを挙げることは不可能であり、ましてや一通り議論の対象にするのは不可能だが、おおよそ、ハウジング研究の最前線は以下のような問題に向かって進んでいる。住宅需要の類型(11, 24), 住戸の「生態学」(すなわち、住居という、社会関係や人格発達のための自己完結的なシェルターの、内部空間のデザイン)(30, 37), 計画的コミュニティにおける居住者のモラル(単なるクレームの一覧表から、モラルの決定要因についての調査まで)(18, 33), 多様な管理の方針と実施がもたらす社会のおよび心理学的帰結(4c), 住宅団地内(19)および周辺コミュニティでの(17, 20)居住者間の社会関係、プライバシーに関与する要因(4c, 10), 居住者の転居率(26), 居住者が自発的と感じているか、厳しく管理されていると感じているか(4c), 居住者による社会組織の形成(25, 29), 単一階級または単一人種(12)コミュニティと、多階級、多民族、人種混住コミュニティ(4c)での、居住者間の態度と関係、等々。これらの領域のうちのいくつかでは、研究の方法と手続きにおける継続的進歩がみられる(3, 4g, 7, 9)。

4 コミュニティ・ハウジングの社会心理学における諸問題

この領域の、果てしなく多様で幅広い研究課題をすべて検討することはできないから、住宅の社会学と社会心理学についての我々自身が継続している研究から引き出した少数例を取り上げることにしたい。データは三つの住宅地での研究にもとづいている。**クラフトタウン**(Crafttown): ニュージャージーの約700家族からなる住宅地。**ヒルタウン**(Hilltown): 西ペンシルバニアの都市にある、ほぼ同数の白人と黒人からなる低家賃団地。**リバータウン**(Rivertown): ニューヨーク近郊の約500戸からなる低家賃団地。これらのわずかな研究結果の例は、社会心理学が、どのようにして実践家と社会学者双方にとっての適切さを引き受けるのかを説明すること、そして、ハウジングという領域における、基本的小および応用的研究の相互作用を説明することを目的としている。

4-1 住宅地のパブリック・イメージ

計画的コミュニティでの研究が、社会心理学者にとって理論的に有意義であると同時にハウジング実践家にとって実際的にも有意義であることは、二つの住宅地それぞれの居住者たちが共有している、「ほとんどの住宅地は「自分が住んでいるところと」似たようなものだ」というイメージについての研究からもわかる。大規模住宅団地の典型的な特徴と考えられているのは何か?そして、こうしたイメージを形作る要因と過程は何か?

この問題についての、より広がりのある研究の一部として、クラフトタウンとヒルタウンの

調査対象者は、ほとんどの住宅団地にみられる特性を述べるように求められた。すなわち、丈夫な造りの／貧弱な造りの住居、集合住宅か独立住宅か、貧しい人々か否か、プライバシーは適正か不十分か、管理人からの過度の干渉があるか否か。はっきりしたイメージを述べられなかったのが、平均してわずか8%だったという結果は、多くの居住者が明確なイメージをもっているということを示している。(簡略化のために、一般的イメージをもたない居住者は以下の報告からは除外されている。しかし、彼らを含めたとしてもここで報告される知見は修正されない。)

クラフタウンとヒルタウンの居住者の間に広がっているイメージは、かなり異なったものである。ほとんどの住宅団地は「頑丈な作りの」住居からなると考えている人々は、クラフタウンではわずか41%であるのに対して、ヒルタウンでは88%である。少々興味深いのは、ほとんどの住宅団地は「頑丈な作り」であるというイメージが広がっているヒルタウン住民が、頑丈なレンガ作りの建物に住んでおり、一方、こうした好意的なイメージをもつ者の割合が低いクラフタウン住民が、木造の住居——トルーマン上院委員会による調査の対象になったほどの悪名高い粗悪建築物——に住んでいることである(トルーマン上院議員は簡潔に、この状況をずばり「劣悪な建築物」と総括したと報じられている)。このことは、二つのコミュニティの居住者が、彼ら自身のコミュニティの特徴を、どの住宅団地にもあてはまるものと考えているということを示唆している。この想定は、別の事実によっても確かめられている。

クラフタウンは持ち家コミュニティであり、その人口の大部分が熟練労働者で、中所得層より低い範囲に収まっている。一方、ヒルタウンは明確に低所得集団のために建設された低家賃団地である。しかも、こうした二つのコミュニティそれぞれの特徴は、住宅地の種類に割り当てられている。すなわち、ほとんどの住宅団地は「貧困層のため」のものであると考えているのは、クラフタウン住民の42%に対して、ヒルタウン住民の83%であった。

こうした傾向については三つ目の兆候がある。すなわち、住宅団地は集合住居またはアパート住宅形式であると考えている者は、圧倒的に平屋の建物に住んでいる者が多いクラフタウンではわずか61%だったのに対し、アパート住戸に住んでいるヒルタウンでは93%に達した。

このように、二つのコミュニティで広がる住宅団地のイメージの違いには一貫性がある。このことが強く示唆——明示していないとはいえ——するのは、居住者は彼ら自身のコミュニティの属性を住宅団地一般という外の世界に対してもあてはめる傾向があるということである。

社会心理学の歴史的発達に詳しい者は、ここで提出された証拠が、どれだけ限定されたものであれ、一世代以上昔にはエミール・デュルケムや〔中国研究者の〕マルセル・グラネほどの社会学者によってさえ適切であると受け止められていたタイプの証拠よりは、正確で厳密であることに気づくだろう。例えばデュルケムは、ためらうことなく、あるオーストラリアのアボリジニ社会では「宇宙は巨大な円形をしていると思念されている。なぜなら、部族の宿営地は円形だからである」と結論づけた。そうした仮説が真面目に受け止められる前に、厳しい経験的検証を経なければならないということは、社会心理学における前進の証である。しかし、そうした見たところ確かそうな証拠が、法的裏付け以上に、社会心理学的裏付けを

もたないことは間違いない。それは事実の推定を提起するが、批判的な検証は提供しない。

より厳格な経験的検証のためには、彼ら自身が暮らす住宅地について、さまざまな主観的印象をもっていることが知られている個人が、同等の性質を住宅地の運営についても想定する傾向があるのかどうか、確かめる必要がある。我々のフィールドワークの過程では、クラフタウンとヒルタウンの居住者が、管理者側から「厳しく管理されている」と感じているかどうかを調べた。

双方のコミュニティの調査対象サンプルには次のように質問した。「〔この団地の〕管理者が、居住者がしてもいいことやしてはならないことについて定めているルールは、あなたが以前住んでいた場所の大家と比べて、多いですか、少ないですか?」。「多い」または「少ない」と回答をした人々には、続けて、彼らが現在の状態を「良いこと」と感じているか「悪いこと」と感じているかをたずねた。「厳しく管理されている」と感じている人々のカテゴリーを構成するのは、「ルールがより多く悪いことである」と回答した人々である。それ以外の人々は、過度のルールによって制限されているという実感を、こちらから促されたときでさえ表明しなかったので、地域管理者から「厳しい管理」を受けているという顕著な実感はもっていないと言えるだろう。さらに他の証拠から、彼らは回答の匿名性の保持については信頼していることが分かっており、管理体制を含む地域の状態に関するさまざまなタイプの不満を、ためらうことなく表明していた。

さらに、全調査対象者に、「ほとんどの住宅団地は管理者側から過剰な干渉を受けているか否か」とたずねた。図1に示したように、結果は自分自身の一連の経験を典型的なものととらえるという傾向をはっきりと裏付けている。自分自身の住宅団地で厳しく管理されているとの実感をもつ人々は、ほとんどの住宅団地でも厳しい管理に従っていると信じやすい。ヒルタウンでは、自分が管理者から「厳しく管理されている」と感じている人の58%が、一般的にそうであると思っている。これとは対照的に、「厳しく管理されていない」と感じている人では19%にすぎない。そして同様に、クラフタウンでは、厳しく管理されていると感じている人の42%、厳しく管理されていないと感じている人の8%が、厳しい管理は住宅団

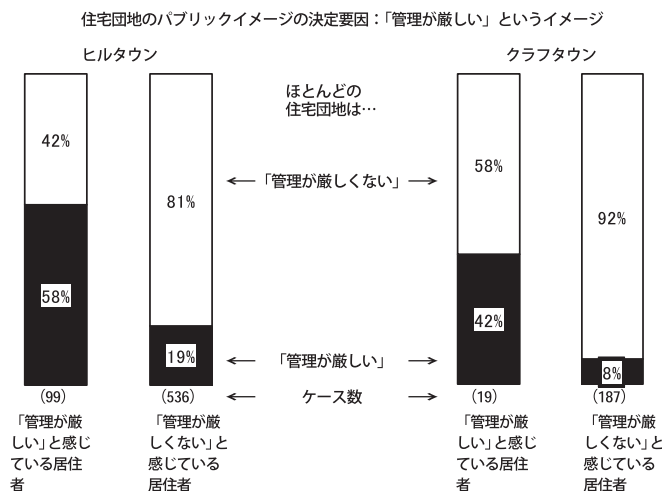
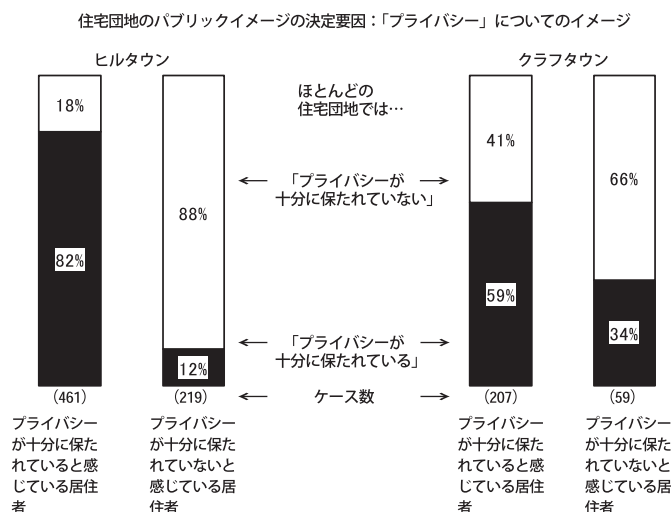


図1



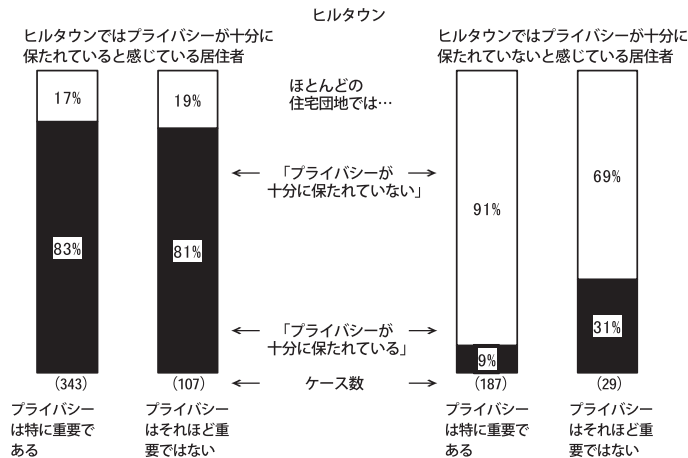
地にはよくあることだと信じている。この過程が二つのコミュニティで独立に生じていることに注意しなければならない。よく似た結果が得られたことで、単一の事例に限定されていれば暗示的なものでしかない知見が、かなりの程度、証拠としての説得力をもつようになる。

住宅団地の性質についてのイメージが居住者自身の経験の投影であるという仮説は、ハウジングの社会心理学に関する我々の継続的研究において、くり返し立証されている。(この「投影」という概念はフロイト派とは違う意味で使用されている。むしろそれは、心理学者の間で一般的になりつつある用語法、すなわち、「経験する被験者によって外的世界に対して付託される、そうした感情状態によって活性化された…必要、実感、感情、イメージ…」(31)のことを指す。)まさにこれと同じようなダイナミックな投影パターンは、194ページの図〔図2〕からあきらかなように、居住者が経験する「プライバシー」の度合いに関しても現れている。ヒルタウンで十分なプライバシーがあると感じている居住者の5人のうち4人が、住宅団地ではこれが一般的であると思っている。クラフタウンでもパターンは同じで、5人のうち3人が自分の個人的経験のイメージにおける適切なプライバシーを投影しており、3人のうち2人が自分の経験のイメージにおける不十分なプライバシーを投影している。

自分自身のコミュニティでプライバシーに関する実感をもっている人々には、この性質をほとんどの住宅地にあてはまるものと考えることで、自分の実感を一般化するという、明確な傾向が見られた。我々はさらに分析の段階を進めて、この投影過程を促進する、いくつかの心理学的条件について探求することができる。居住者のプライバシーへの関心には幅がある。結局のところ、プライバシーはすべての人々にとっての突出した価値というわけではない。中産階級の価値観を忠実に守る人々のように、これをたいへん重視する者もいるが、そうでない者もある。クラフタウン住民の4人に1人、そしてヒルタウン住民とリバータウン住民の5人に1人が、プライバシーが保たれているか否かを「あまり重要ではない」と率直に回答している。

三つのコミュニティの調査対象者それぞれに、次のようにたずねた。「あなたにとって、プライバシーが保たれているか否かは、とても重要ですか？」この簡単な質問への返答に

住宅団地のパブリックイメージを決定づける要因としての個人的価値観の重要性



よって、各個人がプライバシーを突出した価値とみなしているか否かを確実に見分けられるとは考えられないが、一方の群が、おおむね、プライバシーには「いずれにせよ、あまり関心がない」という個人から構成されており、他方の群は、おおむね、プライバシーにある程度重きを置いている人々から構成されていると仮定することはできる。

個人的な価値としてのプライバシーにみられるこうした違いを検討し、我々は図3に示したような結果を得た。

- ・ 自分自身の限定された経験を投影するという一般的な傾向は一貫しており、十分にプライバシーが保たれている人々は、これを計画的住宅地に典型的なものとなししている。
- ・ 十分にプライバシーが保たれている〔と感じている〕人々〔図の左側〕では、プライバシーを重視しているかどうかは、この傾向に全く影響を与えない。プライバシーを重視する人々の83%、そして無関心な人々の81%が、プライバシーが住宅コミュニティにおいて典型的であると考えている。
- ・ ヒルタウンでプライバシーが欠けている〔と感じている〕人々〔図の右側〕にとっては状況が異なる。プライバシーに対する最も鋭い感受性は、それを突出した個人的価値とみなしており、しかもそれが奪われていると感じている人々において見出された。彼らは、プライバシーの不在を正真正銘の剥奪として受け止めている人々である。そして、自らの満たされていないプライバシーへの要求を最も顕著に投影するのも、彼らに他ならない。91%が、団地では一般にプライバシーが欠けていると信じている。

データは省略するが、同じパターンはクラフトタウンでも見られる。これは、H. A. マレーが「補完的投影 supplementary projection」と呼んだもの、つまり、個人経験の特性が他の場所でも同じく典型的に見出されると信じられているケース（例えば、不幸な既婚者は、彼の既婚の友人の殆ども不幸であると信じる）の例証である。

我々が現在進めている研究の成果から引き出された一つの知見にばかり注目すると、最新および生じつつある傾向を議論するという私に課せられた義務に反しているように見えるかもしれない。もしそうだとすれば、その控え目な批判に反論しておかねばならない。

なぜなら、この一事例は、住宅研究においては、社会心理学者の科学的関心と実践家の実
 際の関心がしばしば一致するという一般命題を例証することを目的としているからである。
 この種の広範な、包括的な言明を確かなものとするためには、さらなる綿密な検討が必要で
 ある。

4-2 社会心理学者の立場から

社会的イメージに関する我々の研究が、ただちに理論的な妥当性をもつことは、十分に明
 らかであると思われる。自分自身のコミュニティに備わっている特徴が一般化され、名目上
 類似している計画的コミュニティの性質に投影される。そして、この投影の過程はそのコ
 ミュニティで満たされていない突出した必要によって最大限に活性化される。

しかし、方法に関していうと、この事例は、実験室における実験的研究と、フィールドに
 おける統制的観察の相対的な科学的価値について、いくつかの疑問を改めて提起する。

動機によって決定される知覚、あるいは外的世界に対する特性の非防御的帰属という広い
 意味において、「投影」は、臨床的研究は言うまでもなく、心理実験室において実験的に研
 究されてきた(2, 41)。さて、実験室研究の主要な目的は、「科学の素材を簡略化すること」
 である。しかし、次のように付け加えなければならない。「簡略化するだけの価値があるの
 は、実質的に改ざん (falsify) していない場合のみである」(42)。そして、まさにこの点が
 問われているのである。投影に関する実験室実験は、日常生活における投影に中心的要素と
 して含まれる諸変数を見逃せざるを得ないことによって、コミュニティにおける統制的観察
 を通じた研究が触れることのできる諸変数を「改ざん」しているのではないか？

第一に、投影はある程度の感情的関与と動機付けを伴う。そして、有能な実験心理学者は、
 当然のことながら、被験者における感情移入と動機付けを確定しようと試みる。これは問題
 とされていない。実験室の人為的状况は、感情の面で無菌状態ではないだろう。しかし、人
 為的な感情移入が、日常生活で見出されるもの——典型的には、被験者にとって重要な人々
との社会関係を中心とするもの——に際立って似ているということにはならない。実験室と
 いう孤立した状況で、個人に電気ショックを受けさせることで「ストレス」を発生する方法
 によって、厳しい社会的制裁から普通に生じるようなタイプのストレスが再現されるかどう
 か、疑問である。例えば、重要な他者（個人的な仲間、内集団のメンバー）の目の前で立場
 を失うような経験、安心感と自尊心にとって二重の打撃となる失業、多方面の感情的な影響
 をもつ、住まいの喪失など。

第二に、このような感情移入の社会学的核心は、クルト・レヴィンによるいくつか実験の
 ように、被験者集団を人為的に構成する場合であっても、実験室ではほとんど再現されない。
 なぜなら、一般的に、こうした人為的集団のメンバーは、長期にわたって持続する感情的に
 重要な社会関係の中にいるわけではないからだ。そもそも彼らは、[実験という] 目的に
 沿った、彼らの基本的関心事の一環ではない活動のために、一時的に結び付けられた個人の
 寄せ集めである。実験室では欠落している、持続的な社会関係の構造は、計画的コミュニ
 ティにおける統制的観察においては、簡単にすぐ手が届くところにある。これにより、ロー
 カルな社会構造でさまざまに暮らしている多数の人々のうちで、投影の過程を研究すること
 ができる。

第三に、もし実験室実験者が、何らかの感情——例えば地位不安やプライバシーの剥奪——をもつことが知られている人々を被験者として選定することにより、自我関与を確定しようとするならば、彼はその結果、実験室実験の重大な利点を放棄することになる。なぜなら、統制的実験にとって不可欠なのは、重要な変動が実験者によって導入されることだからだ。そうしなければ、必要な感情をもった被験者やこの感情の社会的あるいは心理学的関連要因を、うっかりと選定しなかったのかどうかを決めることができない。

実験室実験者が、一定の特性にもとづいて人々を選定する、このような手段を採用するとすれば、彼は、統制的観察に従事し、擬似相関の問題と格闘しなければならない研究者とまったく同じ状況に身を置いていることになる。

第四に、計画的コミュニティには、実験的状況を提供するという大きな価値がある。なぜなら、管理者や住民リーダーの決定が、検出可能な変動を引き起こすからである。例えば、管理者が事前通告なしに個々の住居に立ち入る慣例を廃止する場合、プライバシー侵害の緩和が投影にどんな効果を与えるのかを調査することができる。そして、一見すると瑣末な決定でさえ、居住者にとっては、大学教授の実験室で長時間にわたって電気ショックを受けるよりも、長続きする感情的な重要性をもつということもありうる。

最後に第五の点として、この領域での統制的観察は、実験室実験がもつ一つの重大な利点に釣り合う機会をもたらす。それは、研究の再現可能性（replication）である。計画的コミュニティで研究する社会学者は、自分たちの調査を再現することで、暫定的な知見を反復し、点検する必要に迫られていることに気づくだろう。

人為的状況は、生活状況からいくつかの面で逸脱しているために、心理学的実験室での知見を社会的世界に移行させるのは困難であり、危険が伴う。計画的コミュニティは、かなりの程度、実験的研究と社会学的妥当性が有意義な形で融合されるような場を提供する。

4-3 ハウジング実践家の立場から

こうした社会心理学者にとっての利点は、ハウジング実践家にとっては不利にしかならないとの疑いが生じるだろう。投影の過程のような一見すると抽象的な事柄は、住宅地を管理し、居住者のモラルを維持し、そのようにして空室率や転居率を低い状態で維持しなければならない実践家にとって、どんな適切性をもっているのだろうか？この種の知見がもつ実践的な含意を列挙することによって、この領域の応用研究の可能性を明らかにすることができるだろう。

- 1) 経済的「需要」は動機づけを含んでいる。どのような価格であっても、特定の種類の商品に対する需要は、主として二つの相互に結びついた要因によって決定されている。すなわち、その種類の商品に対する欲求と、購買力によるこの欲求の効果的な裏付けである。これは他の商品と同様に住宅にも有効である（今日の「売り手市場」を見ると、人は違った考えを信じこんでしまうだろうが）。
- 2) それで、特定の種類の住宅商品への欲求が、そうした商品がどのようなものであるかについての一般的な理解によって、かなりの影響を受けるのは明らかである。
- 3) 民間および公共の住宅供給における「売り手市場」が際限なく続くわけではないとい

う、ありえなくはない想定にしたがえば、大規模住宅地の一般的イメージは将来の需要に直接影響を及ぼすだろう。

- 4) 住宅投資は長期にわたって行われるという性質をもつため、公共および民間の住宅管理者は、売り手市場と買い手市場の双方を含む、長期的な視野に立つように尽力している。個人的な態度がどうであろうと、市場からの純然たる圧力は、計画的住宅地について流布している印象に注意を向けるよう彼らに命じるとともに、「パブリック・イメージを最悪な状態のまま」放置する余裕をもつことを許さないだろう。
- 5) よくある思い違いにもかかわらず、このことは民間住宅市場と同様に公共住宅市場にも当てはまる。確かに、基準以下の住宅しか手に入れることのできない人の数は、公共住宅の戸数をはるかに上回る。しかし、公共住宅に住む資格がある人のすべてが、将来、公共住宅に住むと見込まれるわけではない。これもまた、社会的動機付けの問題である。あるアメリカ中西部の大都市では、戦時期の深刻な住宅不足の直前、公共住宅当局は、入居の資格と意志がある居住者候補が払底する——とくにある種類のアパートに対して——という事態に敏感になった。そして現在の住宅不足の間、西ペンシルバニアのいくつかの街における公共住宅市場についての最近の研究(22)は、有資格家族の3分の1未満しか、公共住宅に住もうとしないことを明らかにした。これはどの程度、「公共住宅とはどのようなものか」についての、一般に広がっている、おそらく歪んだイメージの結果として生じているのだろうか？
- 6) 民間住宅管理者と共有する住宅商品に対する欲求への関心に加えて、公共住宅管理者は、世間からの攻撃によってきわめて傷つきやすい。すべての公務員が潜在的な標的であるのと同じ意味で目立った標的であるだけでなく、彼は敵対的であることが多い世論環境に少しずつ近づく新しい社会制度を代表している。それゆえ彼が、公共住宅のパブリック・イメージが形成される過程に関心をもつことには大きな理由がある。
- 7) 世論傾向——少なくとも、計画的住宅地のためのローカル市場を構成する人々の間で有力な——の形成に力を貸すのは、計画的住宅地に現在住んでいる人々である。数多くの将来の居住者が、計画的住宅地のイメージを最初に得るのは、現在の居住者とのパーソナルなコミュニケーションのネットワークを通じてである。例えば、クラフトタウンの4分の1以上、そしてリバータウンの3分の1の居住者には、転居時点で、コミュニティ内に住む友人や親戚がいた。
- 8) 公共であれ民間であれ、あらゆる住宅地の管理人は、計画的住宅地にとって、信託にもとづいた代理人となる。彼が、自分が管理する住宅の賃借人たちに、厳しく管理されているとか、プライバシー侵害にさらされているといった実感の根拠を知らず知らずのうちに与えているとすれば、彼は一つの住宅地に対する反感を醸成しているだけでなく、計画的住宅地一般についての敵対的な世論傾向の形成に力を貸している。

この種の社会心理学的な知見の中には、他にも、直接的な実際上の意義がある事柄が数多く存在する。しかし、社会心理学者による経験的研究——これまで示してきた住宅地に関するイメージの形成についての簡単な分析と同様に「学術的」または「理論的」（これらの使い古された単語がもつ不愉快な意味での）に見えるとしても——がもつ、潜在的な実際の効

用を示すには、おそらくこれで十分である。ハウジングという領域での新たな、そして将来の研究が、基礎理論と応用的な社会科学の双方にとって同時に有益なことは確かである。

4-4 建築設計と交友関係のパターン

時間が限られているので、ハウジングという領域において社会心理学者にとって研究の焦点となることが有望な、二つの問題に急いで移りたい。これらの研究領域のうち重要なのは建築設計と社会行動の関係である。

ウINSTON・チャーチルが「我々が建物の形を決め、しかる後に、建物が我々の形を決める」と宣言したとき、彼が巧みな言い回しと真つ当な洞察を開示していたというのは、全くあり得ることだ。さらに、おそらく人は、建築設計の目立たない側面からも、かなりの影響を受けている。それは、建物の形を決める建築家や、建物によって形が決められる人々が、意図も認識もしないようなやり方で作用する。少なくとも、それが、クラフトタウン研究の初期に得られた小さな発見の趣旨であるように思われる(4e)。

クラフトタウンでの親密な人間関係が主として居住の近接の産物であるということは、すぐに明らかになった。この住宅地に広がる平屋の建物は、最大で四つの住戸を収容するように設計されていた。すなわち、それぞれの建物に住んでいたのはクラフトタウンの700家族のうち約0.5%であったにもかかわらず、全友人関係のうち19%が、同じ建物の居住者を含んでいた。また、各調査対象者〔の建物〕に隣接する建物に住んでいたのは平均7家族、つまりクラフトタウンの全家族の1%であるが、親密な個人的紐帯の22%が、これらの隣接建物群に住む人々との間で結ばれていた。そして、各調査対象者からちょうど「通りを挟んだ向かい側」に住んでいるのも、やはり7家族、つまり全体の1%であるが、全友人関係の13%が、この向かい合った位置関係で暮らす人々との間で生じていた。他の要因はさておき、図4に示されている通り、明らかに、純然たる近接性が個人的交際のパターンの決定に際して、主要な役割を担っていた。

我々の調査の初期に、クラフトタウンの全世帯は、コミュニティ・センター（この建物への

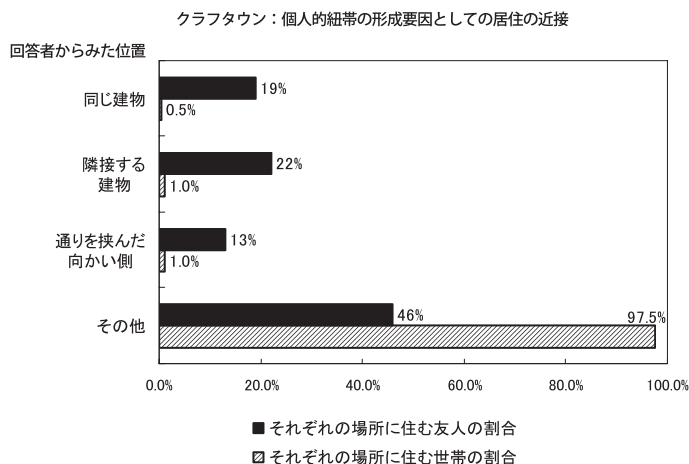


図4

表1 クラフトタウンの5地帯別の、全友人の中で「通りを挟んだ向かい側」の住居に暮らす人が占める割合

	地帯（コミュニティ・センターからの距離による）				
	I	II	III	IV	V
回答者から見て、ちょうど「通りを挟んだ向かい側」に住んでいる友人の割合	4 %	8 %	12%	18%	23%
ケース総数（=100%）	122	116	136	121	123

近さが「社会的接触の中心」としての利用に影響を与えているかどうかを調べる準備作業として）、五つの同心円地帯のいずれかに分類された。それぞれの地帯に住む人々の友人の位置を調査すると、表1に示したように、友人関係の空間的パターンが、一貫してどの地帯に住んでいるかに関連しているという興味深い事実気づいた。

センターに最も近い第一地帯では、調査対象者から通りを挟んだ向かい側の住居には、全友人のうちわずか4%が住んでいたにすぎなかったが、この比率は第五地帯で最も高い23%に達するまで一貫して上昇する。なぜこのようなことが起きるのか？一つははっきりしているのは、これが地帯ごとの住宅間の距離の違いに起因するわけではないということだ。なぜなら、クラフトタウンの通りは完全に同じ幅である。この好奇心を惹かれる一貫性に関わるような、建築設計における他に何らかの性質があるのだろうか？

むしろ我々は、クラフトタウンの住居がみな同じ方向に建てられているわけではないことを知っていた。通りと直角になっているものは、正面ドアが庭の方を向いている。これらの建物の居住者は通りの同じ側の隣人を眺めていた。他の建物は、通りと平行の位置にあり、出入口は直接通りに面している。そしてこの場合、居住者は通りの反対側にいる隣人を眺めていた。当初は、建物の空間的配置の違いのような些細な要素が、友人関係の形成に物理的な影響を与えているなどということは、まったくありそうもないことのように思われた。しかも、居住者は、我々が統計的に発見したような、向かい合った友人関係の空間的パターンには気付いておらず、近所の友人の選択について、もっぱら共通の関心や性格の相性という点から説明していた。

しかし、さらなる観察が、空間的配置がクラフトタウンにおける個人間の紐帯の形成に影響を与える重要な要素であるという予感を、徹底的に追求することへとつながった。地区ごとの、内側の庭よりも通りの方を向いている住戸の比率もまた、次の表〔表2〕のように一貫して上昇していたのである。

あとは、向かい合った〔位置に住む人との〕友人関係の形成パターンが決まる上で、住居の向きが基本的な役割を演じているという明白な含意について、直接的に検証するだけである。少なくともクラフトタウンにおいては、結果ははっきりしていた。調査対象者と、観察者

表2 クラフトタウンの5地帯別の、全住居のうち通りに面した住居の割合

	地帯（コミュニティ・センターからの距離による）				
	I	II	III	IV	V
通りに面した住戸の割合	41 %	50 %	60 %	72 %	83 %
全住戸数（=100%）	118	124	142	123	111

がちょうど「通りの反対側」の住居に住んでいると確認した人々との間の、申告された82の友人関係のうち、

- ・74%は、調査対象者およびその友人が、通りに面した住居に住んでいるケースからなる。
- ・22%は、調査対象者またはその友人が、通りに面した住居に住んでいるケースからなる。
- ・そしてこれらの友人関係のうちのわずか4%だけが、どちらも通りに面した住居に住んでいないケースからなる。

こうした限られた行動の領域において、明らかに何の意図ももっていなかった建築家が、クラフトタウンのどの居住者が親密な人間関係に足を踏み入れるかを左右していた。

この特定の知見そのものの重要性ゆえというよりも、ハウジングにおける社会心理学的研究と密接に関わる三つのさらなる目的に照らしたとき、これと同様の人間関係の空間的パターンが、他の相対的に自己完結的なコミュニティにおいても見出されるかどうかを調査することは有益である。

第一に、この知見の再現は、建築設計が、たとえそれが建築家による意図的な設計でない場合でも、コミュニティで生じる社会的パターンにどのような影響を与えるかを示唆するだろう。もしこれが住居の空間的配置のような些細な要素に当てはまるとすれば、計画されたコミュニティの設計における主要な決定にはさらによく当てはまりそうである。

第二に、これが改めて示唆するのは、人間行動に作用する高度に可視的な物理的要素でさえ、それによって影響を受ける人々自身は意識していないということである。クラフトタウンの居住者は、空間的配置に、自分がそうしていることは気づかないまま反応していた。このことは、ハウジングの社会心理学的研究が、居住者の不満の一覧表と、完全に言語化された行動を越えて、コミュニティ構造における、意識下にとどまった諸要因の研究へと向かわなければならないということを意味している。

そして第三に、このささやかな発見は、かつてラスキンの美学が暗示したような、建築物と社会行動の間の関係が社会心理学における体系的な研究の対象になりうるという事実の兆候である。

4-5 計画的コミュニティにおける人種関係の力学

漸次的コミュニティもさることながら、計画的コミュニティは、その人種の構成と、その結果生じるコミュニティ内の人種間関係に関する、何らかのはっきりとした政策に到達しなければならないために、人種および民族関係という主題は、ハウジング研究の主要な関心の的となってきた。この研究焦点は、人口の大部分だけでなく権力当局にも見られるアメリカ的信条の実現を目指す、我々の社会の長期的傾向の副産物でもある。この現れとして、公的補助を受けた民間住宅開発は、部分的税額控除や土地収用権の行使といった便益を得る代わりに、民族または人種差別を撤廃せよとの法的圧力を、次第に強く受けるようになってきた。民間住宅投資業界では広く知られていることだが、人種混合居住がもたらす結果に対する恐れが、計画中の住宅開発において数多くの住戸の建設を阻んでいる。ここで再び、社会心理学者は、理論的に有意義で実践的に有益な結果を探し求めることを、実践的および科学的に要請されている。

ここでの主要な必要条件は、この研究が動的でなければならず、静的であってはならない

ということだ。現在の民族のおよび人種的態度だけでなく、改変されたコミュニティ状態の下で、これらの態度がどのように変化するかを示さなければならない。そうでなければ、必然的に誤解を招く研究となる。そうした研究は過去と未来を同一視する。それは、「どのようなか」を志向し、〔別な〕確定された条件の下で「どのようなでありうるか」を志向しない研究となる。

この問題の静的な研究がいかに見当外れの推測を招くかを示す例として、ここでは、グンナー・ミュルダールによる『アメリカのジレンマ』(27, 32)に関する調査の一環として行われた、黒人の居住隔離への白人の態度についての全国規模の世論調査を引用する。ミュルダールは、この国のさまざまな地方の77~87%の調査対象者が「黒人の居住隔離への賛成を表明した」と報告している。彼は、このような実証的な根拠にもとづいて次のように観察している。「個別の白人の平均的な態度は、もちろん、否定的なものばかりである。白人は黒人の隣人から『保護される』ことを望んでいる。」

これは、正しく、かつ誤解を招く発言である。それは、白人の多数派において依然として優勢である態度を報告する点においては正しい。そして、ミュルダールが、実際に人種混住の近隣地区で暮らしたことの白人の態度と、そうした経験がない白人の態度について、何の比較もしていない点において誤解を招くものとなっている。彼は事実上、白人対象者に対して、大半が直接の経験をもっていない人種混住状況についての判定を求めた。その結果、調査対象者は、ローカル文化の一部である伝統化された人種態度を表明することしかできなかった。言うまでもなく彼らは、経験にもとづいて語ることはできなかった。つまり、この世論調査は、静的でステレオタイプ化された態度を報告しているだけでなく、特定の社会的条件の下で生じると見込まれる態度の変化に注意を向けることを妨げる。

我々が現在進めている研究から得られた数少ない結果は、この点において適切なものである。人口のちょうど半分を占めるヒルタウンの白人は、たまたま、ヒルタウンへの転居前に人種混住近隣地区に住んだことがある者と住んだことない者に、おおそ二分された。このため我々は、この種の先行する経験を有する人々と、そうでない人々が、ヒルタウンのような〔人種混住の〕コミュニティにおける人種関係についてどのように予想しているかを比較することができる。(もちろん、おそらく不本意ながら人種混住近隣地区に移り住むことを決めた人々の間では、自主的な選択が生じたということもありうる。ここではこの問題を扱うことができないが、コロンビアーラヴァンバーグ研究の詳細では扱われるだろう。)

人種混住近隣地区を「経験した」白人の3分の1、そして事前の経験をもたない白人の約半数が、「これからどうなるか」についての確固とした予想をもっていなかった。しかし、実際の経験をもたないことは、決して、その他の人々が確固とした予想——おそらくステレオタイプや流布している黒人に対する理解にもとづいた——をもつことを阻んでいるわけではない。確固とした予想をもつ人々だけでみると、以前に「経験していない」人々では、「経験した」人々に比べて、人種紛争についての恐怖と不安を予想する者が3倍だった。こうした不安を予想していた者は、未経験者では56%だったのに対して、経験者では19%だった。逆の予想については、結果も違っていた。経験者では72%が、両人種が順応し、「何とかやっていこう」と予想していた。これに対して、予想の基礎となる直接の経験をもたない者では39%だった。そして、友好的で心の通った人種間関係を予想していたのは、両グ

表3 ヒルタウンにおける人種間関係についての白人回答者の予期と人種混住近隣地区での居住経験との関連

ヒルタウンにおける人種関係についての予測	以前、人種混住近隣地区で住んだことがある	一度も人種混住近隣地区で住んだことがない
楽天的（「うまくやっていけるだろう。黒人も白人も変わらない。」）	9	5
協調的（「なんとかやっていくだろう。トラブルは起こらない。」）	72	39
心配だ（「トラブル」「人種暴動」）	19	56
合計	100%	100%
ケース数	115	90
明確な予測を述べない人の数	55	59
この問題について考えたことがない人の数	11	20
回答者総数	181	169

ループのうち、ほんのわずかの人々だけだった。これらの結果は、表3の通りである。

人種混住近隣地区の経験者と未経験者の態度が著しく違うという点を考慮することで、ミュルダールの世論調査データに示されているような、静的で誤解を招く種類のアプローチが根底から訂正されうことは明らかである。さらなる動的な研究の機会は、人種混住の計画的コミュニティによって与えられる。ヒルタウンという人種混住コミュニティに住所を定めることになった後、経験者と未経験者の従前の態度に、何が起こるのか？きわめて簡単に述べれば、結果は次の通りである。もともとあった両グループの間の差異は、おおよそ同じような人種混住経験の下で消滅した。言いかえれば、事前に経験していなかった者も、経験したことがある者の間で広くみられる態度をとるようになる。より詳しい内容は、まもなく公表される出版物で報告されるので、ここでは次のような少数の例で十分だろう。

- ・ 未経験者のなかで、ヒルタウンでの人種関係が予想していたよりも良好であると認識している人の割合は、より現実的な経験者に比べて大きい。おそらく将来は、彼らの予想はより現実に近い、不安に由来する歪曲を特徴とするものではなくなるだろう
- ・ 今や、未経験者と経験者のうち、ほぼ同じ割合の多数派が（それぞれ80%、81%）「ヒルタウンでは諸人種の関係は、かなりうまくいっている」と感じている。
- ・ 未経験者の73%、経験者の82%と、ほぼ同じくらいの割合の人々が、「すべてを考慮に入れると」、以前住んでいた住宅よりも、ヒルタウンの方に住む方がよいと思っている。
- ・ そして事前未経験者の60%、経験者の66%と、ほぼ同数の人々に、ヒルタウン内で黒人の友人または知人がいる。

こうしたきわめてかすかな要約からも、次のようなことが推測されるだろう。

第一に、社会心理学者は、人種混住の計画されたコミュニティの研究を通じて、人種関係の力学について多くのことを学ぶことができる。

第二に、やがて、そうした研究は、これらのコミュニティの人種構成についての重要な決定と直接関わる実践的な適切性をもつようになる。

第三に、こうした研究が蓄積されるにつれて、現在生じている人種間の緊張をマネジメン

トするための指針がもたらされるだろう。いずれにしても、この領域では、基礎研究と応用研究の間には緊密な関係が結ばれるだろう。

私は、ハウジングの社会心理学には、人間行動の決定要因と帰結について探求することを目指す社会学者にとって、そして、大雑把な経験以上の根拠にもとづいて最終的な決定を下すことを目指す実践家にとって、大いに有望な前途があることを確信している。いまここで、さらなる論拠を示すことができればよいのだが、この小さな章にその余裕はない。なされねばならない仕事は多いが、道具はすでに手の中にある。かなり公平な見通しにもとづけば、我々がハウジングの社会心理学の確立に失敗する可能性はほとんどないだろう。

参考文献

1. American Public Health Association. *An Appraisal Method for Measuring the Quality of Housing: A Yardstick for Health Officers, Housing Officials and Planners, Part I. Nature and Uses of the Method*. New Haven, Connecticut, 1945.
2. Bruner, J. S. and Goodman, C. C. Value and need as organizing factors in perception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, January 1947, 42: 33-44.
3. Brunsmann, H. G. Current sources of sociological data in housing. *American Sociological Review*, April 1947, 12 150-155.
4. Bureau of Applied Social Research, Columbia University. *Publications and Manuscripts*.
 - 4a. Lazarsfeld, P., Berelson, B., and Gaudet, H. *The People's Choice*. New York: Columbia University Press, 1948.
 - 4b. Merton, R. K. Sociological Theory. *American Journal of Sociology*, May 1945, 50: 462-473.
 - 4c. Merton, R. K. and Salter, Patricia J. Studies in the Sociology and Social Psychology of Housing. (Under a grant from the Lavanburg Foundation.) Unpublished mss., 1945-48.
 - 4d. Merton, R. K. The bearing of empirical research upon the development of social theory. *American Sociological Review*, October 1948.
 - 4e. Merton, R. K. and Salter, Patricia J. *The First Year's Work, 1945-46: An Interim Report*. Unpublished ms., June 1946.
 - 4f. Merton, R. K. *The Expert and Research in Applied Social Science*. Unpublished ms., 1947.
 - 4g. Merton, R. K. Selected problems of field work in the planned community. *American Sociological Review*, June 1947, 12: 304-312.
 - 4h. Merton, R. K. Patterns of interpersonal influence and of communications behavior in a local community. In P. F. Lazarsfeld and Frank Stanton (editors), *Communications Research, 1948-49*. New York: Harper & Brothers, 1948. (In press.)
5. Chapin, F. S. The effects of slum clearance and rehousing on family and community relationships in Minneapolis. *American Journal of Sociology*, March 1938, 43: 744-763.
6. Chapin, F. S. An experiment on the social effects of good housing. *American Sociological Review*, December 1940, 5 868-879.
7. Chapin, F. S. Some problems in field interviews when using the control group technique in studies in the community. *American Sociological Review*, February 1943, 8: 63-68.
8. Chapin, F. S. New methods of sociological research on housing problems. *American*

- Sociological Review*, April 1947, 12: 143-149.
9. Chapin, F. S. *Experimental Designs in Sociological Research*. New York: Harper & Brothers, 1947.
 10. Chapman, Dennis. *Sound in Dwellings*. Building Research Station of the Department of Scientific and Industrial Research. Wartime Social Survey, New Series Region S. 6, November 1943.
 11. Cottam, Howard R. *Housing and Attitudes toward Housing in Rural Pennsylvania*. Pennsylvania State College Agricultural Experiment Station, Bulletin 436, December 1942.
 12. Couch, S. C. A Study of the Atlanta University Homes: A Negro Housing Project. Unpublished M. A. thesis, Mercer University, 1936.
 13. Dean, John P. *Home Ownership: Is It Sound?* New York: Harper & Brothers, 1945.
 14. Dean, John P. The orientation of housing research. a commentary on the program of the Conference on Research in Housing. *Journal of Land & Public Utility Economics*, February 1947, XXIII: 76-80.
 15. Dean, John P. Problems in Social Aspects of Housing. Interim Report to the Social Science Research Council (in manuscript), 1948. (For a critical review of studies on social effects of bad housing.)
 16. Dewey, John. *Logic: The Theory of Inquiry*. New York: Henry Holt and Company, 1938.
 17. Durant, Ruth. *Watling: A Survey of Social Life on a New Housing Estate*. London: P. S. King, 1939.
 18. Festinger, L. et al. A Study of the Sources of Satisfaction and Dis-satisfaction in a Housing Project, Unpublished ms., Research Center for Group Dynamics, Massachusetts Institute of Technology, 1947.
 19. Form, W. H. Status stratification in a planned community. *American Sociological Review*, October 1945, 10: 605-6 13.
 20. Goldfeld, A. *What Happened to 386 Families Who Were Compelled to Vacate Their Slum Dwellings to Make Way for a Large Housing Project?* New York: Lavanburg Foundation, 1933.
 21. Goldfeld, A. Substandard Housing as a Potential Factor in Juvenile Delinquency. Unpublished Ph.D. dissertation, New York University, 1937.
 22. Housing Authority of "County X." An Inventory of the Local Public Housing Market. Unpublished ms., May 1946.
 23. Howard, G. E. and Ratcliff, R. U. (reporters) *Proceedings of the University of Wisconsin Conference on Social and Economic Research in Housing*, December 1945, *Journal of Land & Utility Economics* (Supplement), February 1946, 22: 93-116.
 24. Institut National d'Études Démographiques. *Desirs des Français en matière d'habitation urbaine*. Travaux et Documents. Cahier No. 3, Paris: Presses Universitaires de France, 1947.
 25. Kessler, Lillian. The social structure of a war housing community: East Vanport City. Unpublished thesis, Reed College, Portland, 1945.
 26. Kilbourn, C. and Lands, M. Elements of tenant instability in a war housing project. *American Sociological Review*, February 1946, 11: 57-66.
 27. Klineberg, Otto (editor). *Characteristics of the American Negro*. New York: Harper & Brothers, 1944.

28. Loomis, Charles P. *Studies of Rural Social Organization*. East Lansing, Michigan, 1945, Chapter II.
29. Marshall, Douglas. Greendale: A Study of a Resettlement Community. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Wisconsin, 1943.
30. Mass-Observation. *An Enquiry into People's Homes*. London: John Murray, 1943.
31. Murray, H. A. The effect of fear upon estimates of the maliciousness of other personalities. *Journal of Social Psychology*, 1933, 4: 310-329.
32. Myrdal, Gunnar. *An American Dilemma*. 2 volumes. New York: Harper & Brothers, 1944.
33. National Housing Agency. *The Livability Problems of 1,000 Families*. FPHA Bulletin No. 28, October 1945.
34. Park, R. E., Burgess, E. W., and McKenzie, R. D. *The City*. University of Chicago Press, 1925.
35. Plant, James S. *Personality and the Cultural Pattern*. New York: The Commonwealth Fund, 1937.
36. Riemer, Svend. The adjustment of family life to its physical shelter. *Research Studies, State College of Washington*, 1941, 49-55.
37. Riemer, Svend. A research note on sociological home-planning. *American Journal of Sociology*, May 1941, 46: 865-872.
38. Riemer, Svend. Sociological theory of home adjustment. *American Sociological Review*, June 1943, 8: 272-278.
39. Riemer, Svend. Sociological perspective in home planning. *American Sociological Review*, April 1947, 12: 155-159.
40. Rumney, Jay and Shuman, S. *Cost of Slums*. Housing Authority of the City of Newark, 1946. (One of the few studies in this field which detects the complexity of the problem.)
41. Sears, R. R. Experimental studies of projection: I. Attribution of traits. *Journal of Social Psychology*, 1936, 7: 151-163.
42. Skinner, B. F. Experimental psychology. In Wayne Dennis (editor), *Current Trends in Psychology*. University of Pittsburgh Press, 1947.
43. Williams, R. M. *The Reduction of Intergroup Tensions: A Survey of Research on Problems of Ethnic, Racial and Religious Group Relations*. New York: Social Science Research Council, Bulletin 57, 1947.
44. Wirth, Louis. Housing as a Field of Sociological Research. *American Sociological Review*, April 1947, 12: 137-143.
45. Young, Terence. *Becontree and Dagenham*. London: Pilgrim Trust, 1934.

〔解題〕

ここに掲載したのは、Robert K. Merton, 1948, 'The Social Psychology of Housing,' in Wayne Dennis ed., *Current Trends in Social Psychology*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, pp.163-217. の全訳である。改めて述べるまでもなく、マートンは20世紀のアメリカを代表する社会学者の一人である¹。しかし、彼のハウジング研究は、三浦(1991)のような例外を除けば、日本ではほとんど知られていない。

ニューヨーク州のラヴァンバーグ財団²からの資金援助を受けて、コロンビア大学応用社会調査局は三つの計画的コミュニティを対象に大規模な調査を実施した。この調査は、計画的コミュニティにおける人間関係をテーマに、1945～48年にかけて行われ、応用社会調査局の副局長を務めていたマートンが主導的な役割を担っている。本論文の文献リストにも挙がっているように、中間報告書(4e)が発行されているほか、方法論に関する論文も書かれている(4g)。書きためられていた草稿(4c)を発展させたものと思われる『社会生活のパターン：ハウジングの社会学の探究』(*Patterns of Social Life: Explorations in the Sociology of Housing*)と題する最終報告書(パトリシア・ウェストとマリー・ヤホダとの共編)は、1948年には完成しているものの、1951年に謄写版が発行されたのみで、正式には出版されていない(Calhoun, 2010: 26)。

マートンには、未発表の原稿や草稿が多数存在することが知られている。クロザーズは、マートンが「価値のない資料を出版することに慎重で、そのことを避けている。これまでいくつもの〈出版されていないもの〉があるが、それらについては何ら未練を残していない」と指摘する(Crothers, 1987=1993: 23)。マートンが『社会生活のパターン』を公刊しなかった理由が、その内容に価値を認めなかったためか、それとも別の配慮が働いたためか、現時点では判断する材料はない。

なお、マートンによれば、本論文で紹介されている、住宅の配置が友人関係に影響するというクラフトタウンでの調査結果は、重要な他者との社会的紐帯の形成に影響を与える「機会構造」(opportunity structure)の概念へと発展したという(Merton, 1996: 158)。また、「予言の自己成就」に関して、ヒルタウンの調査結果を、適切な計画・管理によって人種間のコンフリクトを回避する例として取り上げている(Merton, 1949[1957]=1961: 397)。さらに、コロンビア大学附属図書館の「ロバート・K・マートン文書」には、1940年代のハウジング研究だけでなく、1977年にクラフトタウンで行った追加調査の資料が含まれている³。

¹ *Current Trends in Social Psychology* は、マートンの他、P. ラザースフェルド、L. フェスティンガーなど、著名な社会学者・社会心理学者が参加して、1948年5月にピッツバーグ大学で開催されたシンポジウムの記録である。

² ラヴァンバーグ財団は、1927年、低所得者向けに住宅を供給する非営利機関として設立された。同財団がロウアー・イースト・サイドに建設したラヴァンバーグ・ホームズは、住民協議会や成人教育講義などの社会活動の仕組みを備えた革新的な集合住宅であったとされる(Plunz, 1990=2005: 200)。また、住宅の改良・建設だけでなく、ハウジングに関する研究・出版に対しても助成金を交付してきた(ラヴァンバーグ財団公式サイト <http://www.lavanburgfoundation.org/>, 2010年10月31日閲覧)。

³ コロンビア大学附属図書館希少本・原稿ライブラリー公式サイト

(http://findingaids.cul.columbia.edu/ead/nnc-rb/ldpd_6911309/dsc/6/, 2010年10月31日閲覧)

この調査が行われたのは、アメリカの住宅政策が急拡大した時期である。1937年に住宅法が成立し、低所得者向けの住宅供給に連邦レベルでの法的根拠が与えられる。「1937年から57年までの間に、全米で合計545,594戸の低家賃アパートメントが USHA [米国住宅公社] の資金によって建設された」(Plunz, 1990=2005: 283)。同時期にマートンが手がけた、アメリカ兵や大衆説得に関する研究は、日本でもよく知られている。それらもまた、戦時動員やマスメディアの発達といった公共的な課題に対応するものであった。

本論文を特徴づけるのは、調査における厳密な実証性の追求と、その実践的な応用可能性への信頼である。にもかかわらず、というよりも、だからこそ、実践家に対する批判は厳しいものとなっている。この研究がハウジングを通じた社会改良を目指す団体からの助成を受けて行われていることを考えれば、挑発的な内容とさえ言えるだろう。批判の矛先は、チェーピンのように、マートンに先んじてハウジング研究に参入していた社会学者にも向かう。ハウジング研究が従来のスラム研究から離脱しなければならないという宣言は、彼自身の生い立ちと関わる実存的なメッセージとして読むこともできるが、それ以上に、理論に根ざした科学的な調査こそが適切な政策を導くという信念の表明ととらえるべきだろう。

本論文は、ハウジングという現象を社会学の立場から対象化する最初期の模索である。第一義的には、アメリカ社会調査史の一断面を示す歴史的資料として扱わねばならないが、その知見には、現在でも再検証に値するものが含まれている。もっとも、本論文がきわめて限定された論点しか扱っていないことも明らかである。第一に、パーソナル・ネットワークを媒介するさまざまなメディアの働きには触れていない。第二に、都市管理や政策決定に関わる政治経済学的側面については語らない。第三に、住まいを構成するテクノロジーや物質文化に言及していない。本論文で何が論じられているかだけでなく、何が問われていないのかを考えることで、「ハウジングの社会学」の射程を見極めるための手がかりを得ることができだろう。

文献

- Calhoun, Craig ed., 2010, *Robert K. Merton: Sociology of Science and Sociology as Science.*, New York: Columbia University Press.
- Crothers, Charles, 1987, *Robert K. Merton.*, London; New York: Tavistock Publications. (= 中野正大, 金子雅彦訳, 1993, 『マートンの社会学』世界思想社)
- Merton, Robert K., 1949[1957], *Social Theory and Social Structure: Toward the Condification of Theory and Research.*, Glencoe: Free Press. (= 森東吾, 森好夫, 金沢実, 中島竜太郎訳, 1961, 『社会理論と社会構造』みすず書房)
- , 1996, *On Social Structure and Science.*, Chicago: University of Chicago Press.
- 三浦典子, 1991, 「社会学的ハウジング論序説」『流動型社会の研究』恒星社厚生閣
- Plunz, Richard, 1990, *A History of Housing in New York City: Dwelling Type and Social Changes in the American Metropolis.*, New York: Columbia University Press. (= 酒井詠子訳, 2005, 『ニューヨーク都市居住の社会史』鹿島出版会)

(2010年10月31日受理, 11月18日掲載承認)